

鳥取県発大河ドラマ

歴史大河

第 4 号

編集発行

鳥取県を舞台に！歴史大河
ドラマを推進する会

事務局

鳥取市佐治町加茂七三九
田中精夫宅

第3回歴史大河ドラマ選考会

「老農・中井太一郎」を選出

鳥取県内には、県ゆかりの歴史上の人物が埋もれている。本会はそれらを主人公にした歴史大河ドラマの発掘をめざしている。今年度は、「芋代官・井戸平左衛門正朋」「亀井茲矩と王宮城の夢」「稲作技術の進歩に尽くした老農・中井太一郎」の3テーマからなる魅力ある物語が出揃い、去る9月7日、倉吉立図書館において選考会を開催した。なお、「鳥取県社



第3回選考会 2019.9.7 (倉吉市立図書館)
参加者：100名 有効投票数：82票

会福祉協議会・とつとりいきいきシニアバンク『生涯現役』と共催した。

その結果、2019年度歴史大河ドラマに「稲作技術の進歩に尽くした老農・中井太一郎」を候補として決定した。

今後、ドラマ(大河ドラマ)だけでなく、朝ドラや民放テレビも含めてに取り上げていただくよう、関係先に働きかけていくことになる。

なお、選考会後の9月12日は「とつとり県民の日」であるため、「鳥取県再置」とつとり県民の日」と題して地域史研究家の小山富見男氏にご講演していただいた。(田中精夫記)

選考基準

- ①主人公に、1年(50回分)にわたり興味を引きつけられるエピソードがあるか。
- ②主人公の人生に、我々に訴えかける現代と共通するメッセージ性、テーマ性があるか。
- ③主人公の人間らしさ・喜怒哀楽、主人公を取り巻く家族愛や恋愛、友人との絆、ライバルといった人間関係により、視聴者に感動を与えるか。



2019年度大河候補認定証の授与(2019.9.7)
上: 候補作品「稲作技術の進歩に尽くした老農・中井太一郎」
左: 北村隆雄氏の発表の様子



NHK要請活動

12月18日、共同代表の田中精夫と内田克彦、及び2019年度代表の北村隆雄氏、これまでの歴史大河ドラマ候補代表表片山長生氏、小椋弘美氏、四井幸子氏はNHK鳥取放送局(局長 熊登御堂朋子氏)を訪問し局長に要請書を提出すると共に現状の報告をした。

「三愛のクニへ」澤田節蔵・廉三と美喜」の現況

◎推進会を立ち上げ、定期的に研究会を開催している。

◎小説が2作品完成した。

「赤とんぼの母」碧川かたの生涯 現況

◎定期的に研究会を開催している。

◎県の補助事業を受けて県内各地で巡回を実施している。

◎鳥の劇場で龍野の会と共催し赤とんぼの劇を公開した。

「怪僧・豪田」の現況

◎推進会を立ち上げ、定期的に研究会を開催している。

◎米子、西部地域で紙芝居や講演会を開催し好評を博した。

NHKからは、本会の活動が広く県民に浸透することを期待しているとのことであった。

《選考会候補者の発表紹介》

☆芋代官・井戸平左衛門正朋

発表者 根平雄一郎

弓ヶ浜に住む人々は、砂浜で米ができないので芋を食べて生き延びてきた。米どころの米子の人々から「浜の芋太」とバカにされたが、飢饉のときも、戦時中の食糧難の時代も、芋を食べて生き延びた人々は「粘り強さ」とか「進取の気質」等の人格が形成されていた。明治時代、境港で教師をしていた足立儀代松は、当地の若者をカナダやアメリカに多数移民させた。リーダーシップをとった足立はまさにそのチャレンジ精神の持ち主だった。弓ヶ浜に芋が植えられたのは、1780年のこと。境村の幸次郎が石見国の船頭に種芋をもらい植えたのが始まりとされる。このおかげで農業に不向きであった弓ヶ浜の人たちが飢饉から救われたのである。山陰に芋栽培を奨励し人々の飢えを救ったのは、石見銀山の代官、井戸平左衛門である。彼が江戸から赴任し活躍したのは1732年ごろという。平左衛門のお陰で山陰の村々で芋栽培が始まり、山陰の人々は飢饉から救われた。そのドラマを紹介するも

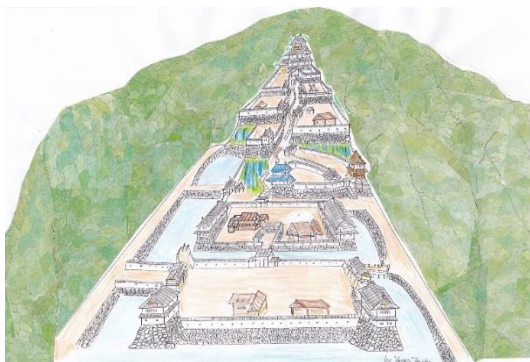
☆亀井茲矩と王舎城の夢

発表者 田中精夫

亀井茲矩は、1557年玉湯町に誕生。尼子氏が滅亡後に流浪の身となり各地を放浪した。1568年、ごろ京都で山中鹿介に出会い尼子再興軍に加わる事になった。鹿介と義兄弟となり、因幡各地で転戦し1573年には、17歳で八頭町の私都城主となった。毛利軍に追われ、因幡を退いた後に信長の配下で戦った。上月城合戦で尼子氏が滅亡後、鹿介の志を引き継ぎ、因幡の地に尼子一族を根付かせた。秀吉に仕えて、1581年の鳥取城攻略で大功を挙げ、因幡鹿野城主に任命され1万3千5百石を領した。茲矩は、秀吉から「琉球の守」の称号を賜った。茲矩は海外に目を向ける剛勇の者として称えられた。秀吉の朝鮮出兵で水軍に属して李舜臣と唐浦海戦で戦い、秀吉から賜った金团扇を奪われたが、現地で一躍有名となった。固城での守備、釜山機長城での中国・朝鮮軍の撃退など数々の戦功を挙げ凱旋した。秀吉の死後、関ヶ原合戦で東軍に属し勝利した。長束正家の城受け渡しで功を挙げた。しかし、鳥取城受け渡しに苦戦し、家康に鹿野3万8千石の城主に与り定め置かれた。後、茲矩は城下の整備と、殖産興業に尽くし藩民に慕われた。1612年当地に没した。信長、秀吉、家康の時代に、海外貿易を夢見て、機敏な行動力と交渉力で活路を切り開いていく茲矩を華やかな安土桃山文化の時代風景で楽しんでいただきたい。



芋代官の記念碑前で語る根平氏（境港市）8/18



鹿野城復元図試案（田中精夫作）

☆近代稲作の父 中井太一郎

発表者 北村隆雄

久米郡小鴨村（現在の倉吉市）の出身で、明治時代において農業改良に一生を捧げた。①日本で初めて「田植え定規」を考案し、全国に「正条植え」を普及して回った。この「稲」を等間隔に植える正条植えは、いまでは田植え機に引き継がれ、省力化や病害虫に強い米づくりを実現した。②「水田中耕除草機」通称「太一車」を発明して雑草取りという重労働から米づくり農家を解放し、米の生産性向上に大きな足跡を残した。この太一車は東南アジア、アフリカなどでも使用が拡大している。③太一車の特許取得が契機になり好意的に雑誌に掲載され、実際に農民の作業が楽になり農作業や生活を大きく変えてきた。この頃から【全国巡回】が始まった。④太一郎は学術研究をまとめる。「帝国農家結合」会員となり役員に任命され、農業や人間の生き方を発信した。⑤【地元】では倉吉農学校教授に任命され後輩を育てた。「鳥取県農会」が発足し、その名誉会員となって力を注いだ。

特別寄稿

「碧川かたを朝ドラの主人公にする会を立ち上げて」

代表発起人 瀧口節子

「碧川かたを朝ドラの主人公にする会」(通称かたの会)は偶然と必然が重なって生まれたような気がします。私と鳥取の繋がりも同じです。私はたつのふるさとガイドをして十年になりますが、ガイドの知識は「碧川かたは龍野の二本家を追われ東大看護専門養成所に入学した」所まででした。

高齢者大学で論文を書く機会を与えられ書くなら露風の母碧川かたを調べてみたいと考えました。その為、鳥取のかたの生家やわらべ館の顕彰碑を訪れ、偶然にもかたの朗読劇に出会ったのでした。予感と言いますか佐々木千代子さんに「連絡先を教えてくださいませんか?」と申し出ました。それが今に繋がっているのが不思議です。

かたの人生は連続ドラマのようにほとんど前に走り出し、母として妻として社会運動家として様々な難所にあつかる度に見事に乗り越えていく様はとても心地良いものでした。このような動乱の時代に自らの意志を貫き通し、弱い立場の人々に惜しみなく愛を与え力を注いだ生き方に尊敬の念を抱くと共に「人の生き方は地

位や名譽や財産でなくどれだけ人の為に生きられたか?」が大切と改めてそんな思いにかられました。

かたの会が発会して二年の歳月が経ちましたが、全速力で駆け抜けて来た様な気がします。活動内容はかたサークル(月二回勉強会)、署名活動、出張講座、イベントへの参加、市民劇団わくわくプロジェクトの創作劇「赤とんぼよ永遠に」(鳥取講演トリノ劇場・十一月九日・十日公演)紙芝居、かたの歌、たつの市役所玄関に懸垂幕取付け、令和元年夏にはJR本竜野駅に赤とんぼの曲が流れます。また文中智子氏の熱い想いが込められた「女権の現代訳」の発行とますます拡がりを見せています。「女権」はかたの神髄であり、現代の女性の生き方に指針を示し、女性進出社会における応援歌だと思えます。

かたの人生がテレビ放映化によつてより多くの人がかたの人生に共感し、自立した女性が生きていきと活躍できる社会につながることを切に願うこの会を立ち上げた次第です。



講演会で発表する瀧口節子氏

大河ドラマ「いだてん」を楽しむ

二〇一九年大河ドラマ「いだてん」が過去最低視聴率の八・二%で終わった。時代が明治大正と現在(一九六〇年代)とを歩き来し、人物も金栗四三・田畑政治・古今亭志ん生が入替り立替りに登場したため、視聴者が複雑だと思つて見なくなつていったのだろう。

しかし、私はさすがクドカン脚本と、その複雑さを堪能し、毎回楽しんで見た。また、オリンピックと政治との絡みについて、①一九四〇年東京五輪招致に対して、ムソリーニがローマ立候補を取り下げてくれ、ヒットラーが働きかけたのは、その後の日独伊三国同盟締結への底流が背景にあつたこと。②、一九六四年東京五輪の二年前にインドネシアで開催されたアジア競技大会で、台湾・イスラエル選手団に入国許可を出さなかつたのは、スカルノ大統領の中国・アラブ諸国への政治的配慮であり、日本の参加に批判が起り田畑の辞任につながつたこと、などキツチリ押さえていた。

さらに、登場人物と深い関わりを持つものの、役柄としては登場しなかつた鳥取ゆかりの人物を探し出しては楽しんだ。例示すると三島弥彦と大村一蔵、永井道明と三橋喜久雄、人見絹枝と三橋義雄、市川崑と碧川道夫など。

「いだてん」は永遠に再生され続けることを、一大河ドラマファンとして断言したい。(内田克彦)

編集後記

中部開催は大盛況であった。昨年の西部地区開催に引き続き、中部の方の大河ドラマへの想いを感じた大会であった。

開催地、北村隆雄氏の発表は見事なものであった。ドラマ化への熱い想いが伝わるものであった。中井太一郎が稲作の近代化のために、日本各地を訪れ、彼の発明した除草機や道具を使って、人々を説き、人々の暮らしを豊かにしていったかを、熱く物語るものであった。彼の活動なくして、日本の農業はなかつた。そして、その技術や精神は今でも開発途上国に根付き世界の食料生産に貢献していることを知った。ぜひ、彼の物語を大河ドラマとして実現してもらいたいものである。

残念ながら選外となった根平雄一郎さんにもエールを送りたい。氏は境港からの初の参加であった。氏が発表した芋代官・井戸平左衛門は、短期間であるが江戸から山陰地方に赴任し、人々に多大な影響を与え、人々の飢えを救った傑物である。食は人間の生活の基本である。今後日本をよみがえらせる源は農業にあるに違いない。鳥取発の農業をテーマにした大河ドラマを鳥取発で生み出したいと思つた次第である。(田中精志)